

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第90号

毎月発行

発行 2019年(令和元年)11月16日 土曜日

2019年(令和元年)11月16日 土曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、66歳、経営
コンサルタント、趣味は縄
文研究、今年1月に『東北先
史時代学』を提唱、東北から
日本を変えることを標榜。また縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。映像プロデュース事業にも進出。



東北の埋もれた歴史を発掘する映像企画 第二弾 『鬼がつくった日本刀』 11/16から撮影開始 全国に分散した奥州刀鍛冶の悲しい歴史を掘り起こす

『鬼がつくった日本刀』 撮影開始

日本人で日本刀を知らない人はまずいない。しかし、日本刀のルーツが東北にあることを知る人は非常に少ない。おそらく東北人でもそうであろう。
次の映像企画は、この日本刀の歴史を紐解くところから始まる。
かつて、東北には「奥州



【鍛冶神像掛図】・・・鬼とされた奥州刀鍛冶

刀鍛冶」と呼ばれる職人集団がいたが、彼らが日本刀の作り手、担い手であった。しかし、彼らのその後には、迎える道は実に悲しい。住み慣れた東北の地を強制的に移住させられたのである。そこから、映像企画『鬼がつくった日本刀』は、予想もしないような深まりを見せるのだ。
詳しくは、来年三月の公開を楽しみにしていただき

たいが、右の画像が彼らの行く末を如実に示している。この行く末を聞いて、憤らない東北人はいないだろう。そしてこの歴史を埋もれたままにして良いと思う東北人もいないだろう。
第二弾の撮影開始まで
筆者の郷里である宮城県涌谷町の七千年に亘る歴史を取り上げた映像を今年三月に上映してから約半年が

経過した。
この半年間、次の映像企画をいろいろ模索してきたが、いよいよ今月十六日から、宮城県岩出山で撮影を開始するところまでこぎつけた。
この間さまざまな紆余曲折があったが、映像世界はまったくの未経験者でありながら、無謀にも潜り込んだその世界をいろいろと勉強してきた。
右も左も分らず、教えられないことを意味もよく分らず実行してきたというのが実情だった。
そうした紆余曲折、反省を踏まえた映像企画であるので、少しは進歩したと自負している。

東北の埋もれた歴史 を発掘する

それだけでなく、連続した映像企画を貫くテーマも

より明確となってきた。
それは東北の埋もれた歴史を掘り起こすということである。
『東北の消された歴史』
と言いつつ、言い換えても言い過ぎではないかもしれない。
時の権力と戦い、負け続けた東北だが、裏返せば、かつては朝廷と三十八年間もの長い間戦い続けた実力を有していたということでもある。

他の地域でも戦いはあったが、適度なところで妥協して降伏したが、東北だけは降伏しなかった。
しかも初戦は完全勝利したので、面子をつぶされた朝廷との戦いは長期に及び、ついに力尽きた。
こうした戦いを踏まえて、歴代の政権は東北の再浮上の芽をことごとく、徹底的に摘んできたのだ。
結果として、あらゆる歴

史が消された。
この映像企画『鬼がつくった日本刀』も、消された東北の歴史のひとつだ。

『東北の埋もれた歴史発掘』は当新聞の今後の活動の主要部分を占めていく予定である。第二弾に続く第三弾も準備中



中鉢美術館



舞草刀 閉寂 (ふさちか)



第63回

水産業再興のための 料理レシピ紹介

【サバのトマトソー スのせ】

福今日の試作は、タイムの香りを使った、サバのトマトソースのせ。オリーブオイルでニンニクとトマトを炒めたソースが美味です。とても手軽に出来ました。(松本談)



郷土料理愛好家
松本由美子氏

【材料】 サバ切り身 4切れ、トマト 2個、ニンニクみじん切り 2片、玉ねぎ千切り、オリーブ油 適量、タイム 適量

【作り方】 オリーブオイルをひいたフライパンにタイムの枝を入れ、油に香りに移して取り出します。そのフライパンで玉ネギをさっと炒めて皿に盛ります。サバを両面焼いて、玉ネギの上に乗せます。同じフライパンにオリーブオイルを少し足して、ニンニク(みじん切り)、トマト(みじん切り)を炒め、塩・コショウで調味します。そのソースを盛ったサバの上にかけて、タイムを乗せるとおしゃれな出来上がり。ニンニクとトマトのソースが美味しいです。(松本談)

日本を取り巻く漁場では「魚種交代」という現象が起きている！

秋の味覚を代表するサンマの不漁が食卓に打撃を与えている。魚屋の店頭や海鮮料理屋で見かけるのは小さなサンマばかり。イワシやスルメイカの漁獲も不振が続く。しかし全ての魚が捕れなくなっているのではなく、マサバなどは漁獲量が増えたようだ。どうやら日本を取り巻く漁場で「魚種交代」という、数十年規模の変化が起きているようだ。



サンマ不漁記事



不漁のスルメイカ

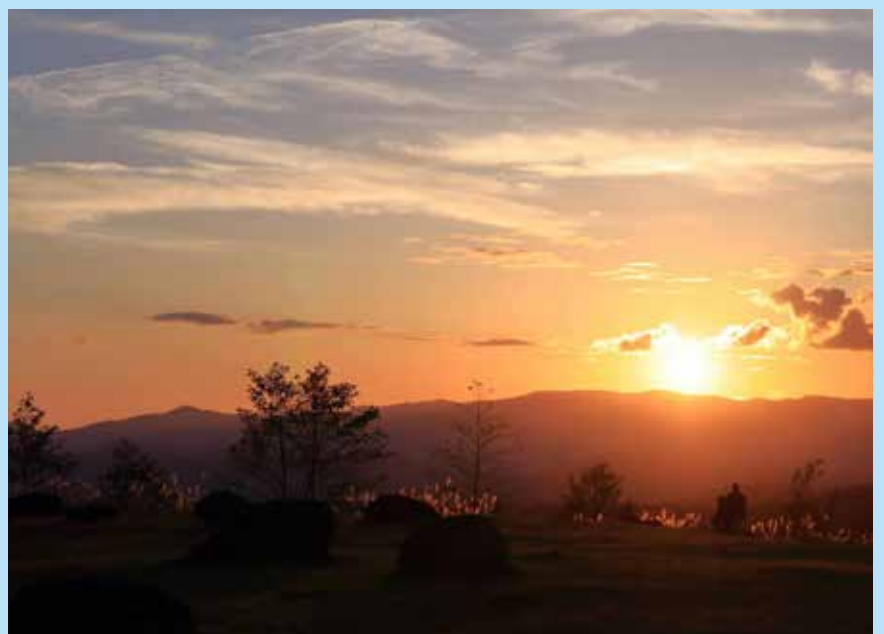


豊漁のマサバ、ついでにゴマサバ画像も



写真でお伝えする
東北の風景
紅葉

写真撮影 尾崎匠



台風被害から どう身を守るか

相次いだ台風被害

これから来る可能性もあるが、また振り返るには早いのかも知れないが、今年はいのちの大きな被害が相次いだ年だった。まず九月九日に千葉市付近に上陸した台風一五号は、千葉市内を中心に広い範囲に停電と断水をもたらした。被害が広範囲に亘ったことから復旧にも時間が掛かり、断水が九月二五日まで二週間以上に及んだ地域もあった。

一〇月二日に伊豆半島に上陸した台風一九号は関東地方から東北地方南部を縦断し、福島県で三二人、宮城県で一九人、千葉県で二二人など、実に死者九五五人という甚大な被害をもたらした。広い範囲で河川の氾濫が相次いだほか、土砂災害や浸水被害が発生した。人的被害に加えて住宅被害、電気、水道、道路、鉄道施設といったライフラインへの被害や交通障害も多数発生した。

これだけ台風による大きな被害が相次いだことで、今年は台風の発生数や上陸

生じた。断水の被害はとりわけ甚大で、宮城の丸森町や福島の相馬市の一部などに復旧していない地域も存在する。一月二日で一カ月になるが、いまだ合わせて二七〇〇もの人が避難生活を送っている。

一〇月二日から二六日にかけては、西日本から東日本、北日本の太平洋沿岸に沿って進んだ低気圧に向かつて南から暖かく湿った空気が流れ込むと同時に、日本の東海上を北上した台風二一号の湿った空気が流れ込んだことで記録的な大雨が発生し、再び土砂災害

浸水被害、河川の氾濫が発生し、千葉県で一人、福島県で二人の死者を出し、住宅被害、停電や断水等ライフラインへの被害や鉄道の運休などの交通障害が発生した。

これだけ台風による大きな被害が相次いだことで、今年は台風の発生数や上陸

数が増え、台風そのものの規模も大きくなっているという印象がある。しかし、過去の台風のデータと台風の発生数、接近数、上陸数などを見ても、今年が特に多かったというわけではない。

ただし、記録的な雨と風に見舞われたのは事実である。一〇日から三日までの総降水量が、神奈川県

箱根で一〇〇〇ミリに達したのを始め、一七地点で五〇〇ミリを超えた。三時間、六時間、一二時間、二四時間降水量の観測史上

一位の値を更新した地域も多数あった。風についても、東京都の江戸川臨海で観測史上第一位を更新したのを始め、七か所で最大瞬間

風速が四〇メートルを超えた。この他、海でも記録的な高波が観測され、過去最高潮位を超える高潮を観測したところがあった。いろいろな要因があるのだから、台風の規模の割に雨の

量が風の影響が大きくなり、被害が拡大したように見える。

私の体験

台風一九号に関する私自身の体験をお話しようと思う。二日は仙台市内の職場で仕事をしていた。朝から昼に掛けては風もほとんどなく雨も小降り、いつも通り自転車で出勤できた。様子が変わってきたのは陽

が沈んでからである。一九時過ぎには雨も風も強くなってきた。この時台風は伊豆半島に上陸したばかりであり、強さは「猛烈」から「非常に強い」を経て「強い」まで下がっていたのだが、大きさは依然として「大型」であり、その広範囲に及ぶ影響の大きさは感じられた。

職場を出たのは二時頃だったが、その頃には雨風共に強くなっていた。ただし、レインコートを着て自転車で乗ることはできる程度の雨、風だったので、自転車で帰路に就いた。職場近くの広瀬川は水量が増えて河川敷まで水に浸かり、川幅がものすごく広く見えた。

自宅近くに名取川があり、橋の上から見るとやはりこちらの水量も増していたが堤防の高さまでにはまだまだ余裕があるように見えた。橋を渡ってから幹線道路を折れ、名取川と並行に通っている道を進むと、JR線をくぐるアンダーパスがある。そこが冠水してはいないか用心しながら進んでいくと、全く冠水してはいなかった。そこで道を折ら、アンダーパスをくぐって上った。そこから道を折

れて名取川を背中に川沿いの住宅地を通って自宅方面に向かおうとしたところ、何とそこがひどく冠水していた。膝下くらいまで水が来ていて、水の抵抗で、自転車も軽いギアでないに進めない状況である。なぜ川のすぐそばの窪地であるアンダーパスが冠水していな

くて、そこより高いところにある住宅地が冠水しているのか、目の前に広がるあり得ない情景に大いに戸惑ったが、とにかくさらに深く用心しながら進んだ。幸い、その区域を抜けたら、隣の区域にはほとんど水はなく、自宅付近も冠水して

いなかった。後から思えば、これは「内水氾濫」だったのだろう。降った雨水が下水道や水路から排水できる許容量を超えて水が溢れ出す現象である。元々その区域は周囲より若干低いのか、通常の雨の際にも周囲に比べて長く

水が残っている印象があり、水はけのあまりよくない区域とは思っていた。しかしもちろん、これほどの冠水を経験したのはもちろん初めてである。

我が身を振り返ってみて、今回のこの台風を甘く見ていたことを反省している。東北にいくと、台風に直撃されることはほとんどなく、どこかよそに上陸した台風が勢力を弱め、速度も上げて通過することが多いため、今回も恐らく大したことはないだろうとの甘い読みがあった。もし今回の台風が「強い」ではなく「非常に強い」や「猛烈」であったら、河川の増水や住宅街の冠水はさらに激しいものだったかもしれない。そのような命の危険を伴ったかもしれない。

「命を守る行動」とは

今回の台風のうち、最も大きな人的被害をもたらしたのが台風一九号であることは間違いないが、とりわけ福島県内で三二人もの死者が出たことは衝撃的であった。いったいどうしてこれほど多くの人が命を落とすことになったのだろうか。

そのことについてはNHKが既に分析していた。それによると、死者のうち一人は車の中屋外にいて命を落としたこと、一人は住宅の一階にとどまっ

て命を落としたことが明らかになっているのである。いずれのケースも、避難が遅れたことによる命を落としたのだと言える。福島県や宮城県に台風が接近したのが一〇月二日から三日にかけての夜間であったことも避難が遅れた要因として挙げられよう。

そして、当時の福島県内の雨量を見てみると、台風が上陸する一日前の一〇月一日から福島県を縦断した一三日にかけての総雨量は、福島県内の各地で平均の一〇月一カ月の実に二倍から三倍に達していた。ところが、一時間当たりの雨量で見ると、五〇ミリを超えるような激しい雨を観測したのは福島県内では一地点のみで、それ以外の地域では一時間に二〇ミリから三〇ミリほどにとどまっていた。このことも避難行動を鈍らせた可能性がある。

すなわち、危機感を覚えなさそうな雨の降り方だったのである。ただし、それが間断なく続いたことにより、河川の増水、堤防の決壊、土砂崩れの発生につながるような総雨量となっていたのである。

こうして見ると、自分の身に迫る危険をどう正確に把握し、いかに安全を確保するかは本当に大きな課題である。地震であれば揺れが来た際にその揺れの大きさで避難の必要性がある程度判断できる。しかし、台風に関してはそうした自分の五感を通じた判断が難しいのである。

ならばどうすればよいのか。五感では判断できないとなれば、別の情報を判断の根拠とする他ない。すなわち、気象庁や自治体などから出される災害に関する情報である。決してこれを軽々に捉えてはいけない。このような時には、自分にとって都合の悪い情報を無視したり過小評価したりする「正常性バイアス」が掛かる。そのことを十分頭に入れて上で、空振りや恐れずに早めに避難を開始するこのことに尽きる。

今回、各携帯電話会社の緊急速報メールサービスを利用して災害・避難情報を配信した自治体も多くあった。これも避難を促すのに有効な手段ではあるが、一方でメールが来るまで情報

に自ら積極的に情報を収集することが必要で、そのためにはスマホの防災アプリの活用をお勧めしたい。「NHKニュース・防災」、「Yahoo!防災速報」、「g00防災アプリ」、「特務機関NERV防災」などがお勧めである。

平時の情報収集も重要である。各自治体や国土交通省が作成している「ハザードマップ」を確認して、自分の住んでいる地域にどのような危険があるのか、特に今回のような風水害の際にどこにどのくらいの浸水が想定されているのか、その上で安全な避難ルートは

どこなのかをしっかりと把握しておくことが必要である。仕事などで、自宅以外にいる時に災害に遭遇する可能性があるのかについても確認が必要である。

そしてまた、東日本大震災の際に嫌と言うほど思い知ったが、これらハザードマップを妄信しないことも重要である。ハザードマップはある想定の下に作成されたものであるが、その想定を上回る事態も起こり得る。ハザードマップの想定を「最低限」と考える目標も持つべきである。

今回浮き彫りになったのは、河川の本流と支流とがぶつかる地点で支流の水が水かさが増した本流に流れにくくなり、そこから越水し、あるいは堤防の決壊に

つながる「バックウォーター現象」の頻発である。今回の堤防の決壊のうちの八割は本流と支流の合流点から一キロの範囲に集中しているという。こうした地域ではいち早い避難が命を守ることにつながる。

既に道路が冠水している場合の車での避難の危険さも、今回のこの福島県での状況からは分かる。車は雨や雪といった悪天候の中でも走るのに、水には強いように思われがちだが、それはあくまでも上から降ってくる雨や雪についてである。足元からの水には実は弱い。ドアよりも水位が高ければ室内に浸水してくるし、さらに水位が高くなると水圧でドアが開かなくなり脱出が困難になる。エンジンルームに水が浸入し、エアクリナーまで水に浸かると、燃焼に必要な空気を取り込めず、エンジンが停止する。後部のマフラーが水に浸かると排気ガスが排出されず、やはりエンジンが停止する。こうなるともう車に乗っているのは身動きが取れなくなる。こうして見ると、冠水の中車で移動できる限界の水深は、マフラーの高さより下でギリギリということになる。そのことも肝に銘じておかないといけない。

今後も台風による風水害は繰り返し起こり得るに違いない。その時にどうすれば「命を守る行動」が取れるのか、平時から改めて考えておきたい。

執筆者紹介

大友浩平

(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブローグ」
<http://blog.livedoor.jp/anagnasi/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>

ケルティック・ミュージックの舞台たる東北の事

本誌が創刊された二〇一二年当初、私がしばしば東北とアイルランド、スコットランドといった西欧の地域の比較をしたり、また自分が趣味としているアイルランド音楽の話題や写真を載せたりもしていた事を思い出す。実のところ、現在もほとんどそれらについての想い・愛着は変わっていないのだが、あまりに地域の共通性だとか繰り返しているのも野暮であるし、音楽に関してはいくまで個人の好み・趣向のものなので文章でいくら説明してもその魅力はわかってもらえない、聴いてもらおうしかない、と考えて近年はほとんどこれに関連して書く事はなくな



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

つてしまっていた。しかし、その後一〇年近くたった現在、スコットランドの英国からの独立運動については英国のEU離脱を巡っても世界中に周知の事となり、またそれに呼応するように周辺ケルト圏への関心も高まり、また当地域の音楽シーンもまた勢いを強めていると聞く。

どういう訳か遠く東洋の島国・日本においても「ケルト圏の音楽」熱はここ一〇数年、衰えを見せない隆盛ぶりだ。隆盛といつても、前述の通り特にマイナーな音楽に関しては興味のない人にはなかなかその実感に届かないだろうが、おそらくジャズ・ロック・演歌やあらゆる民族音楽の中でも、ここ一〇年二〇年で情勢が最も変化したジャンルが、このケルティック・ミュージックである。しかしながら特に日本での一時のブームに終わらない、その演奏形態や技術、コミュニティが新世代にも引き継がれるような一大ジャンルとして定着しつつあるその動きについて、上手く解説した記事を私は知らず、またその音楽コミュニティは今や日本全国に存在しながら、その発展には東京などの大都市部に比べて地方は不利であり格差が生じている、という問題点について

言及するコラムなども未だ目にしない。そこで本稿では、あらためて自身が自身なりに長く関わってきたケルト圏の音楽と、それを東北の各地で演奏し人々にその魅力を伝え広めようと奮闘する音楽家たちの姿にも焦点を当てながら、東北の変化してゆく未来の一つの可能性を探してみたい。

*

アイルランドをはじめとする「ケルト圏」の音楽とは何か、甚だ才不足ながらあらためて解説してみたいと思う。それはアイルランド、スコットランド、ウェールズ、イングランド・コーンウォール地方、フランス・ブルターニュ地方、スペイン・ガリシア地方などの所謂ケルト民族の文化を色濃く残す地域に伝わる音楽である。ただし「ケルト音楽」という呼び方には注意が必要だ。というのも、ケルト民族、という概念自体が近代以降に現れたもので、学問的な定義が難しく、幻想的概念であるとも言われてきたからである。かつて現在のフランス中心に広く分布し、多くの共通項を持ちながら単一民族であった事実もなく、そして各地域がケルト以後も長い歴史の中で違う特色の音楽を形成してきたのであって、それをケルトとひと括りにするのは誤りである、という見解が長く為されてきた。

東北人にわかりやすい例えでいえば、津軽三味線や岩手の鹿踊りの囃子、最上川舟唄などを「縄文音楽」とか「えみし音楽」などと呼ぶ者はいない、ということころだろうか。確かに、アイルランド人がケルト民族であった古代、現在のアイルランド音楽が演奏されてきた訳ではないだろう。至極、まっとうな話である。しかしながら、これらの地域の伝統音楽には、隠しきれない、紛れもなき共通点を感じられるのも間違いない事だ。民族と音楽が無関係ならば、共通する音楽がイングランドやフランス本国に広がっていてもいいはずだが、そうはならなかった。彼らの音楽には独特の魅惑的なうねりや高揚感があり、それは既存の国境を越えた「ケルト的」なるもの、古代から遺伝子に刻まれたかのように継承されてきた何か、としか捉えようのないものである。(しかしこれも実際に聴いていただく以外にないが) さて、ケルト音楽は書くまでもなく民謡である。民謡といえは古臭い音楽として若者に疎まれる「ダサイ」ジャンルの代名詞だ。ところがその本来「ダサイ」は少ならずあり、二〇〇〇年代後半にはアイリッシュパブでのセッションが広く行われ、またこのジャンルでプロを目指す音楽家が出てくる、その胎動となっていたのである。

めとする、「ケルト圏」の伝統音楽も元来は、地元若者たちに疎まれ、見向きもされない「ダサイ」ジャンルに違いはなかった。ところが、七〇年代に大変革が訪れる。この音楽に新風を吹き込み、「カッコいい音楽」にしてしまふ天才の登場である。アイルランドのドナル・ラニー、ブルターニュのアラン・ステイターは彼らを育てたロックス・ミュージックの起源にケルト音楽がある事を知り、その脈を鋭敏に感受したのかも知れない。特にこれ以降、アイルランドはエンヤ、アルタンなどインパクトのある音楽家の存在やギネス、アイリッシュパブといった明確な文化が徐々に日本にも浸透していった事によって着実に知名度を高めていきケルトIIアイルランドと認識される程の時代が長く続いてきたのである。日本ではザバダックや遊佐未森を始め、早くからアイルランド音楽に魅せられた音楽家が少数ながら存在した。そして一般の間にも、未だコミュニティ形成には至らぬまでも、個人レベルでこの音楽に接近していった者は少なからずあり、二〇〇〇年代後半にはアイリッシュパブでのセッションが広く行われ、またこのジャンルでプロを目指す音楽家が出てくる、その胎動となっていたのである。

役は近年、長らく安定の感があるアイルランドに替わって「隣国」スコットランドに移りつつあると、ネット上で読める『世界のケルト音楽を訪ねて』にて日本のパウロン奏者トシバウロ氏が綴っている。実際に、日本でもスコットランド音楽に拘る演奏家が急増している感があるのだが、その背景には何かがあるのか。スコットランドは伝統音楽分野においてはアイルランドに遅れを取り、つい近年まで「何故そんな音楽をやってるんだ」というような声が多数派だったという。スコットランドの有名アーティストがアイルランドにケルト音楽を学びに行く、というような事も普通にあつた。それが今や、近年美術デザイン分野で知られた大都市グラスゴーを中心に毎夜無数のセッションが繰り広げられるケルティック・ミュージックの先進地と化しているというのである。この波はいくつもの要因が重なって生まれたようだ。まずは周知の、ここ数年に最高潮の盛り上がりを見せた独立運動である。三百年の間「英国の一地方」に位置づけられてきたスコットランドにとって、初めて独立国・アイルランドと同様に民族の象徴、アイデンティティの表現としての音楽に目覚めたのだ。

二つ目に、スコットランド政府による助成金の制度がある。八十年代まではケルト音楽方面に割かれていた文化振興の予算が、ケルト音楽の発展の財源として降りるようになった。これにより多くの人材を刺激し取り込むことになったのである。そして三つ目に、アイルランドとは違うスコットランド独自の音楽特性がある。アイルランド音楽の広まった要因として、演奏しやすいキー、即ち良い意味での単純明快さがあるが、これに對しクラシックが盛んで長らく他ジャンルに曝されてきたスコットランドの音楽は複雑さがあり、意外性に富んでいる。かつて日本のケルトファンからも敬遠されてきたその特質こそが、現在の実験的・挑戦的性格につながり、民族の反骨気質に相乗してケルティック・シーンを塗り替える原動力となつていいると思われののだ。この勢いは近年独自のウイスキーとともに音楽の復興の夜明けを迎えているという、ウェールズへと続いているのである。

ではケルティック・ミュージックブームの最中にある日本、なかなか東北に位置づけられてきたスコットランドにとつて、初めは独立国・アイルランドと同様に民族の象徴、アイデンティティの表現としての音楽に目覚めたのだ。二つ目に、スコットランド政府による助成金の制度がある。八十年代まではケルト音楽方面に割かれていた文化振興の予算が、ケルト音楽の発展の財源として降りるようになった。これにより多くの人材を刺激し取り込むことになったのである。そして三つ目に、アイルランドとは違うスコットランド独自の音楽特性がある。アイルランド音楽の広まった要因として、演奏しやすいキー、即ち良い意味での単純明快さがあるが、これに對しクラシックが盛んで長らく他ジャンルに曝されてきたスコットランドの音楽は複雑さがあり、意外性に富んでいる。かつて日本のケルトファンからも敬遠されてきたその特質こそが、現在の実験的・挑戦的性格につながり、民族の反骨気質に相乗してケルティック・シーンを塗り替える原動力となつていいると思われののだ。この勢いは近年独自のウイスキーとともに音楽の復興の夜明けを迎えているという、ウェールズへと続いているのである。

ここでやはり、スコットランドを思い出してみるのがいい。『英国の一地方』に甘んじている間、スコットランドは音楽もとも目の目を見なかった。己の独自性に基づき立ち上がってこそ、民族とその魂としてともに輝きを取り戻したのである。日本ではまだまだ高



今年10月、大船渡市で初めて催されたケルティック・セッションにて

「日本の一地方」である事をやめ、東北として立ち上がる事。東北でもやっていると誇りを持つ事。そうすれば例えいつか東京でこの音楽が飽きられ、見向きもされなくなつたとしても、この厳しき大地の魂の音楽として一人一人の心に染み渡り愛され続ける。その時初めて、ケルティック・ミュージックは私たちの風土とともに静かに栄える、東北の文化となるに違いない。



ナツハゼの紅葉



夕暮れの猫神社



エメラルド湖



ニシキギの実



高清水夕景



夕暮れと牛たち



ヤマハマナスの実



水鏡 2

シリーズ 遠野の 自然

「遠野の 立冬」

**遠野
1000景より**

今年もまた「立冬」がめぐって来た。月日の進行は、古い加速とともにどんどん速くなるように感じる。今年の巨大自然災害は大洪水をもたらした台風。予報が外れ、関東だけでなく長野県や宮城県に大きな被

害をもたらした。いまでも被災に苦しむ住民がいる。気候変動のせいで台風が大型化したと大騒ぎするが安定した自然などはもともとない。それは人間の勝手な願望にすぎず、常に変化に身構える必要がある。

人間の思惑など気にも留めず、多少の変動を伴い列島の四季は進行する。その大きな循環が確実に回転することに、他の動物や植物とともに感謝すべきである。

東北は埋もれた歴史の宝庫

あちこち旅して分かる東北の歴史の厚み

離れて分かる、しかも西日本へ

東日本内の移動だけでは分からない

筆者は宮城県の内陸部のいなか町の出身で、大学進学と同時に東京に移住した。入学当時は「ブーズー弁」をしゃべってみると周囲からずいぶん分かれたものだ。

しかし、いまとなってはすでに東京の暮らしの方がはるかに長い。半世紀近くになる。

この居住地の移動によって分かったことは、言葉の違い、宮城県のいなか町と違いすぎる人の量。まさに「人酔い」と表現できるものだった。

電車に乗降する人の量、

都市部をせかせかと歩く人の量に酔ってしまった。ほとんど人を見かけない場所の故郷から人で溢れかえる場所への移動によるギャップであった。

住宅地も密集していた。田舎者の筆者には息が詰まるほどの狭さに暮らすのが都会生活と妙に納得した。でも違いはそれくらいだった。根本的な違い、質的な違いは感じなかった。

西日本に行つて分かること

今年の春以降、毎月たて続けに各地に旅行した。最初は、宮城県の故郷である涌谷町。次は仕事の関係で群馬の長野原町。そして宮城県仙台市と大崎市。妻の故郷の新潟。

今度は一転して西日本の島根県の出雲と奥出雲。地元の歴史好きのボランティアの方と話したら、東北のことは何も知らないということだった。島根の他の人もそうだと。

島根の人の言葉、特に奥出雲の言葉は東北の言葉と似ているという松本清張原作の「砂の器」という映画があったが、そんな親近感はずっと感じられなかった。

奥出雲の、高い山がなく低い山が連なり、木々がうつそうと茂る地形が妙に東北に似ているくらいだった。次は大きく離れて北海道。千歳から、平取町、釧路、苫小牧と電車旅。移動距離

が長かったのでもとても疲れた。

縄文文化とアイヌ文化を追いかけて行った旅だったが、道路が広くて直線で、風景もスケールが大きいこと、人が困っていると気軽に助ける雰囲気を除けば、特に違和感はない。ついで奈良。ここは大分趣が変わっていた。今までの場所とは何かが質的に違うと感じた。それが何なのかは最初よく分からなかった。

本音を聞かなければ

通りすがりの観光客ならば内面に影響を及ぼすことはほとんどない。普段の自分がいて、目に映る外観が変化するだけのことだ。しかし奈良は違った。たまたま、奈良駅近くの飲み屋さんで奈良のことをじっくり話した。

すると、奈良や京都に住む人と、東京や関東に住む人との違いという話題に移ったとき、奈良の人の本音が見えた。

すなわち「東京人は東も西も」で「奈良や京都のように古いまちではない」から「人との調和」に細心の注意を払わないし「言葉遣いも乱暴」だということ。

これが奈良や京都の古都の人たちの本音だと気づかされた。

要するに言いたいのは、関東は、東京を含めて田舎で、新興の成り上がりだということ。そして古都には

千年を越える歴史があり、東京はたかだか百数十年ではないかということ。

東京に半世紀近く暮らし、東京が日本の首都だと疑いなく思っていた筆者は驚いてしまった。

古都の人々はいまだにそこが日本の「都」であると思っていて、東京など出来立てほやほやの「都」にすぎないと考えていたのだ。

まざまざと古代の歴史が脳裏に蘇る

こうした古都の人たちの本音を聞いた後の奈良観光はずいぶん分と観光という気分からはかけ離れてしまった。歴史的な建造物を見るたびに、かつては、ここから兵士たちが関東や東北を攻撃しに出陣したのだとか、古代の政庁跡を見れば、ここで関東や東北攻略の戦略をめぐって議論を戦わせたのだとか、連想が連綿と、東京や関東に住む人との違いという話題に移ったとき、奈良の人の本音が見えた。

さらには、観光の移動中に何者か分からないが、しきりに筆者の脳に直接語りかけて来るものがあるように感じられてならなかった。単なる思い過ごしと断定するにはリアルな質感を伴って、筆者に何度も呼び掛けてくるのだ。

実際に、この旅行の最中にも何度も「異変」が起きたし、旅行から帰っても、奈良旅行で訪れた場所にまつわるテレビ番組が出てき

たりした。めったにテレビで取り上げられるような場所ではないのに不思議極まりない。

その時点でつぎと、誰かが筆者に呼び掛けていたことを確信した。

その正体との「出会い」が非常に謎めいているが、また筆者のオカルト好きが頂点に達したからではないかとの指摘も予想されるのではあるが、数日経つてから「正体」が判明したのだ。

知らずに浮囚の移配地を旅していた

東北の埋もれた歴史を掘り起こす映像の第二弾は、古代の奥州刀鍛冶の物語である。

刀鍛冶だけでなく、奥州の製鉄職人も実は、東北の居住地から「浮囚(ふしゅう)」として全国に「移配(いはい)」された歴史的事実がある。

なんとその「移配地」のひとつが、筆者が奈良観光をしていた場所だったのだ。

そういうえば、なぜ突然奈良旅行を思いついたのかも不思議だった。いま思えば、何かに導かれて行ったように感じる。

*「浮囚」…大和朝廷の支配に属した人たち

*「移配」…強制移住

この日本はやはり別々のクニで出来ている

最近、筆者は、この日本という国、その国民は、ひ



榎原神宮

とつではないと痛切に感じると。話す言葉だけでなく、文化も異なる。歴史も異なる。おそらく宗教意識も異なる。そうした違いを「日本という同一性」という虚構で覆っているが、ふたを外せば、独自の文化、歴史、宗教意識が飛び出してきているのではないか。

あまりにも強制的に「同一」だと思いつまされていくから「同一」と誤解しているだけではないかと思うのである。

奈良も京都も独自である。出雲も奥出雲も独自である。北海道も独自、もちろん東北も独自である。

これらの独自性をもっともつと掘り下げていくとうなるのだろうか。地方色豊かとかいう通り

一遍の言葉ではない、他地域とはまったく異なる独自の文化と歴史が表面にどんどん出現してきて、華やかな多様な色が乱舞するのではないか。

そう思えてくるのだ。

東北の歴史はコンクリートで固められている

それにしても東北の場合、負け続けた歴史はいやというほど記憶されているが、それ以外の華々しき時代の文化、素晴らしい遺産はすっかり忘れ去られ、地中に埋もれているのではないか。

地中深く埋められ、分厚いコンクリートのフタを何枚も重ねて、二度と表舞台に出ないようにされているのではないかと感じる。かつての平和な文化、自



奈良石舞台

然と調和して、縄文以来の伝統を守り続けた文化はいまはすっかり忘れ去られた。もしそれが事実ならば、なにゆえにそこまで徹底して秘されることになったかをもう一度考えてみればよい。

さあ東北の歴史を掘り起こせ

かつての東北はひとつの広大な文化圏であったと考えている。

縄文時代から続くとするば約二万年にも及ぶ歴史がある。それ以前の歴史も埋もれている。

比較するつもりもないが、奈良や京都の千年という尺度とは段違いだ。

そうした壮大な歴史が、現代の東北に先行する歴史だという認識を持つ人は東

北人にいるだろうか。さらに、その歴史が育んだ文化が今も生きていると考えている東北人はいるだろうか。

古代の東北人は、独自の歴史と文化を守ろうとして、圧倒的な力の差があったにもかかわらず、三十八年もの長き時間を中央集権国家と戦ったということを忘れてはならない。

他の地域に比べても、東北の歴史掘り起こしは進んでいるとは思えない。

いま進行中の「東北の歴史を掘り起こす映像事業」はその点で起爆剤になればそれに越したことはない。当事業を推進する際には、さまざまな人や先人たちが協力してくれるに違いない。



牡蠣鍋はほんと美味かった！

【第41回三陸酒海鮮会(11/9)】 東北地酒も牡蠣鍋も最高！ ご参加のみなさんありがとうございました

見よ！この東北地酒ラインアップ。純米酒以上の厳選された東北地酒。地元でもなかなかお目にかかれないという東北地酒が並んでいる。
二十名弱の参加者に一升瓶十本。ひとり平均五合以上の割り当て。これが三時間飲み放題というのだからコスト最高。お店の協力なしにはとても無理。焚火家さん、いつもありがとうございます！
海鮮は旬の牡蠣鍋とそれ以外にも食べきれないほどの海鮮がどんどん出てくる。牡蠣鍋は特に美味かった。
筆者もあちこちの日本酒の飲み会に参加するが、やはりこの会が一番だ。
メに『流し』の無料サービスまでついた。リクエスト多数で大盛上がりだった。足掛け七年も続いている大震災からの復興支援の飲み会はそんなに多くないが、さらに継続中。



“流し”もあり！



当日の東北地酒ラインアップ



元気な女性陣



宮城の伯楽星と乾坤一



人気の刈穂と阿櫻



日本酒大好きオジサンたち



岩手のAKABU



常連の写楽と日高見